相川
あいかわらばん
瓦版
第29号
2017年9月25日発行
《編集・発行》
佐渡市産業観光部
世界遺産推進課
電話 0259-63-5136
FAX 0259-63-6130

今号は奉行所特集!!

佐渡奉行所をライトアップ

7月14日から8月12日の間、週末の夜限定イベントが、「国史跡 佐渡奉行所跡」において催されました。主催は、町民遠足などのイベントも企画している「すきだっちゃ相川会」です。（町民遠足の詳細は本紙22・28号をご覧ください）

期間中は毎週末に、復元された奉行所の建物が美しくライトアップされました。また、ライトアップされた奉行所を背に、市内の4団体が日替わりで民謡を披露しました。披露されたのは、佐渡おけさをはじめ、相川音頭や相川甚句、両津甚句など、佐渡を代表する民謡です。

当日はガイドによる佐渡奉行所や北沢浮遊選鉱場の解説もあり、観光客を中心に延べ約380名が、幻想的な光の空間と佐渡の歴史・文化を堪能しました。最終日の入場者は100名を超え、立ち見が出るほど大盛況でした。

佐渡奉行所と相川音頭

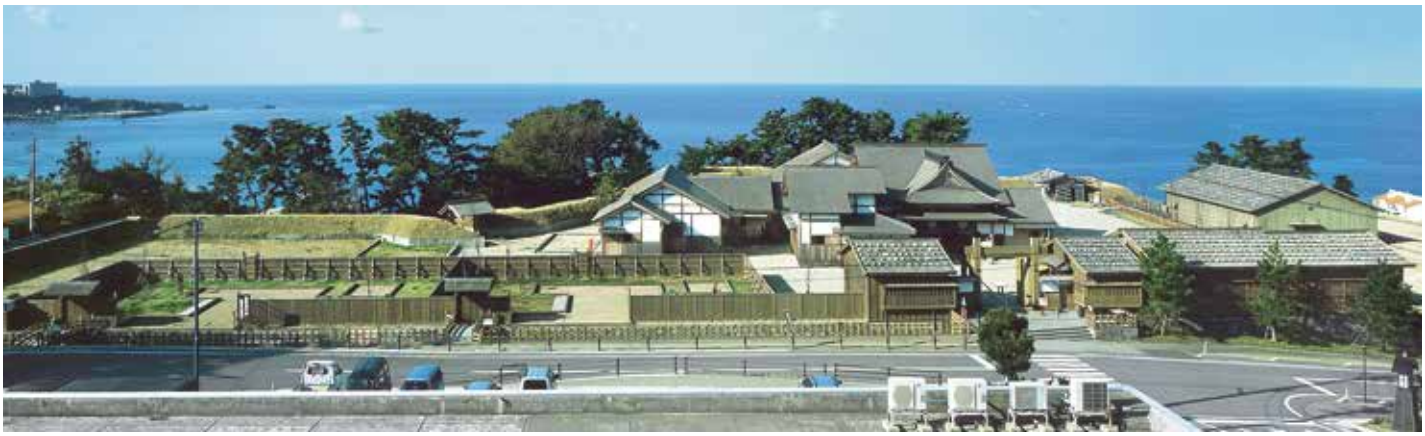
相川音頭にはさまざまな歌詞があることをご存じでしょうか。私たちがよく耳にするのは、「源平軍談」にある義経の弓流しというエピソードの一部で、尚武の気風を高めるために、佐渡奉行が作詞させたともいわれています。

相川音頭は盆踊りの歌謡として生まれたと考えられています。江戸時代中期以降、心中ものや恋愛ものなど、さまざまな歌詞が生まれ、相川など町人の間で流行したようです。

寛永18年（1641）の『異本佐渡風土記』には、「今年大広間（奉行所内）に踊りがあり、町々より金銀の飾りものを指上げ芸を尽くした」とあります。これは、佐渡奉行に披露する「御前踊り」のことで、そこで披露されたのが相川音頭だとされています。奉行所の広間に紫幕などを張り、高張提灯を立てて、奉行が見物する習わしだったそうです。島内の音頭取りは、御前踊りに参加することを何よりの誇りとしていました。

参考：磯部欣三「佐渡歴史散歩 金山と流人の光と影」、小山直嗣「新潟県の民謡」

佐渡奉行所のいまとこれから



復元された佐渡奉行所

奉行所の歴史

上町台地の先端に位置する佐渡奉行所跡は、江戸時代の始めに佐渡代官・大久保長安によって建設されました。以後、江戸時代を通じて島の行政を担い、鉱山を一手に管理する中心的な役所であり続けました。

建物は、度重なる火災による焼失や、奉行所機能の拡充・縮小・変更などにより数度の建て替えがなされてきましたが、最終的には昭和17年の火災によりすべて焼失してしまいました。現在見ることのできる奉行所の建物は、安政5年（1858）に焼失し、翌年再建された江戸時代最後の奉行所の様子を、平成13年に復元したものです。そして現在は、国史跡「佐渡金銀山遺跡」の一部として保護が図られています。

奉行所のいま

現在の奉行所は、敷地内に入ると江戸時代にタイムスリップしたような体験ができると世代を問わず好評です。

しかし、オープンしてから既に15年以上が経ち、徐々に施設の劣化が目立ち始めてきました。また、近年は江戸時代を体感できる空間を活用したイベントも増加しています。

奉行所のこれから
―「史跡佐渡奉行所跡 整備基本計画」の策定―

佐渡市では、今年3月末、奉行所の再整備のための基本的な考え方を計画書にまとめました。国の文化財としての価値を確実に未来につなげるとともに、来館者が快適に、そして楽しみながらも相川のことをより深く知ってもらうことが目的です。計画書は、来年度に印刷し、図書館などで閲覧できるように準備中です。

今後、この計画をもとに順次、整備を行っていきます。文化財の整備には、精密な調査と十分な検討、慎重な工事が求められます。通常の工事より時間がかかりますが、使いやすく、親しみのある施設へと着実に近づけていきたいと考えています。

皆様も、ぜひ、佐渡奉行所跡に足をお運びください。

天保13年(1842)の絵図にみる佐渡奉行所
（「佐渡一国海岸図」相川郷土博物館所蔵）

大正時代の佐渡奉行所（相川郷土博物館所蔵）

佐渡ヘリテージマネージャー

歴史的建造物の保存修理をまなぶ

日光　巨大な素屋根に覆われた輪王寺本堂

長期にわたる保存修理のため、本堂は7階建ての「素屋根」に覆われている。

日光　担当者から直接説明を受ける

本堂を例に、保存修理の考え方や技術について解説していただいた。

日光　素屋根内部は保存修理の最中

素屋根内は大きな空間が広がり、修理中の本堂を囲うように作業用足場が設けられている。

日光　修理が施された屋根の部材（野地板）

材の交換は最小限にとどめる。古い材との区別がつくよう、交換した材全てに修理年を示す焼印が入れられる。

桐生　「桐生伝建修習の会」との意見交換

研修者それぞれが自分の意見や感想を述べ、疑問に思ったことは積極的に質問。

桐生　修理事例の見学（修理の考え方を聞く）

古い材は可能な限り再利用。桐生も日光も共通の考えで保存修理が行われていた。

今年3月、歴史的建造物の保存について学ぶため、佐渡のヘリテージマネージャーを対象とした研修会を開きました。

ヘリテージマネージャーとは、建築の専門家（建築士など）のうち、歴史的建造物の保存に関する講習を受け、県建築士会から認定を受けた人のことです。現在、佐渡には10名のヘリテージマネージャーがいます。

研修会場は、「日光の社寺」として世界遺産にも登録されている国重要文化財「輪王寺本堂」（栃木県日光市）の修復現場と、国重要伝統的建造物群保存地区「桐生新町」（群馬県桐生市）でした。実際に保存に取り組む担当者に話を伺い、現地を案内していただきました。

輪王寺では、伝統工法と最先端技術を駆使し、気が遠くなるほど緻密な修復作業がなされていました。大規模な修理現場に圧倒されましたが、歴史を守るその真摯な姿勢から、文化財保存の普遍的な考え方を学びました。

桐生新町では、建築士や職人、行政が協同で町並みや歴史的建造物の保存に取り組む「桐生伝建修習の会」の活動を伺いました。会の皆さんと意見交換し、異なる立場の人々が互いに理解し、協力して文化財保存に取り組む秘訣などを学びました。

相川の今昔

下相川の水田開発 その1

慶長８年（１６０３）に佐渡代官に任命された大久保長安は、上町台地の端部に陣屋（佐渡奉行所）を築き、陣屋を中心に鉱山町の整備を進めていきました。このとき、陣屋を築くのに必要な土地を確保するため、旧羽田村の「半田」「清水ヵ窪」（今の相川広間町の辺り）の田地などを、山師から五百両で買い取ったといわれています。

陣屋築造のために上町を追われた百姓らには、下相川の段丘上にある「人見（ひとみ）」「群居（むれい）」など、約８haの土地が替地として与えられました。このようにして上町から下相川に移った百姓らが開墾した辺りは「海府百姓町」と呼ばれていたそうです。

空からみた現代の相川市街地

第30号の予告

◆活動報告　ほか

次回11月24日
刊行予定

今月のにゃんじー

「秋の佐渡」

黄金色に輝く稲と、澄み渡った青い空。
秋の佐渡は一段と美しくみえます。

あいかわらばんのデザイン:佐渡市産業観光部世界遺産推進課　キャラクターデザイン:aki*kana haraguro design studio　印刷:㈱第一印刷所